死都ポンペイ

死都ポンペイ 15

岩波写真文庫 154

岩波写真文庫
154

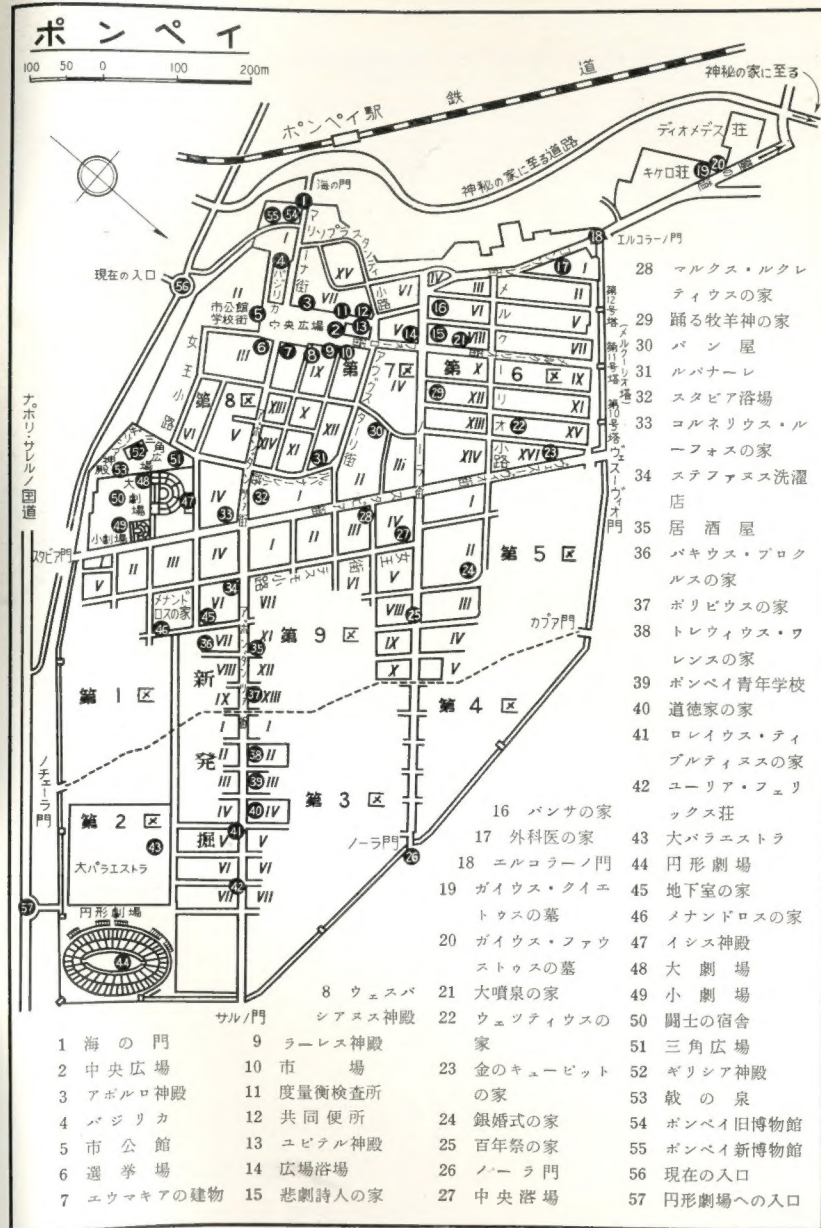
死都ポンペイ

編集　岩波書店編集部
監修　角田文衛
写真　岩波映画製作所

目　次

中央広場

はじめに

ヴェスウィウス大爆発の光景を伝えた、小プリニウスが友人タキトゥスに宛てた二通の手紙は、この歴史的な出来事を伝える記録として残っているが、それはまことにしずかな書きぶりである。ただ面白いと思ったのは、爆発の直後遠くから見たウェスウィウスの上あたりに、今でいう原子爆発のキノコ状の雲が現われていたというところである。また軽石や灰がひどく降って、地上のものがどんどん埋もれてゆく光景を書いたところは恐ろしい印象を与える。このプリニウスの手紙にくらべて十九世紀イギリスの作家リットン卿が書いた「ポンペイ最後の日」という小説に出てくるウェスウィウス爆発の描写は、もちろん想像から出たものであるが、はなはだ悽愴をきわめている。その一節「……突然、空中に鈍い影がさした。本能的に振りかえってみると、山嶺が二つに裂け、一方の大きな頂がゆらゆらと左右にゆれ、言葉ではいいあらわせないすさまじい響とともに根本から折れて、それは恐ろしい火の雪崩となり、山腹をまっしぐらにすべり落ちてきた。同時に真黒い煙の大きな塊が湧きたち、――空中に、地上に、海上にまでひろがった。そして前にもまして物凄い灰の雨があとからあとからと降ってきた……」。かくて二千年の永い間地下に眠っていたポンペイが、やがて私たちの前に姿をあらわしたのだ。

定価100円　1955年7月10日　第1刷発行　1957年4月20日　第2刷発行　発行者 岩波雄二郎　印刷者 米屋勇　印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社　製本所　永井製本所　発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3　株式会社岩波書店

ポンペイ

1 海の門
2 中央広場
3 アポルロ神殿
4 バジリカ
5 市公館
6 選挙場
7 エウマキアの建物
8 ウェスパシアヌス神殿
9 ラーレス神殿
10 市場
11 度量衡検査所
12 共同便所
13 ユピテル神殿
14 広場浴場
15 悲劇詩人の家
16 パンサの家
17 外科医の家
18 エルコラーノ門
19 ガイウス・クイエトゥスの墓
20 ガイウス・ファウストゥスの墓
21 大噴泉の家
22 ウェッティウスの家
23 金のキューピットの家
24 銀婚式の家
25 百年祭の家
26 ノーラ門
27 中央浴場
28 マルクス・ルクレティウスの家
29 踊る牧羊神の家
30 パン屋
31 ルパナーレ
32 スタビア浴場
33 コルネリウス・ルーフォスの家
34 ステファヌス洗濯店
35 居酒屋
36 バキウス・プロクルスの家
37 ポリビウスの家
38 トレウィウス・ワレンスの家
39 ポンペイ青年学校
40 道徳家の家
41 ロレイウス・ティブルティヌスの家
42 ユーリア・フェリックス荘
43 大パラエストラ
44 円形劇場
45 地下室の家
46 メナンドロスの家
47 イシス神殿
48 大劇場
49 小劇場
50 闘士の宿舎
51 三角広場
52 ギリシア神殿
53 戟の泉
54 ポンペイ旧博物館
55 ポンペイ新博物館
56 現在の入口
57 円形劇場への入口

ナポリから見たウェスーヴィオ火山。
海中に突き出ているのは中世の卵城。

ポンペイの歴史

ポンペイはナポリの東約二五粁、ちょうどヴェスーヴィオ火山裾野の南縁に位し、ナポリ湾にのぞんでいる。はじめオスク人やサムニート人の町であったが、紀元前八〇年頃ローマに帰属した。その頃からローマの植民がさかんに行われ、船着場であると同時に地方商業の中心地として繁栄した。ローマの貴族はこの地に豪華な別荘をかまえ、盛時には人口約二万五千を数えたと推定される。最初の大地震があったのは紀元六三年の二月五日。その時まで死火山と信じられていたウェスウィウスが突然活動をはじめたのである。直ちに復旧工事がすすめられたがそれが未完成のうちに破局の日はおとずれた。ティトゥス帝の君臨していた紀元七九年の八月二四日、午過ぎのことであった。数日前から鳴動を続けていたウェスウィウスが突如噴火をはじめ、その裾野の村や町を一瞬のうちに修羅の巷と化した。その噴火の状況は、小プリニウスが友人の歴史家タキトゥスにあてた書簡の中で詳しく語られている。当時博物学者として知られた彼の叔父大プリニウスは、ウェスウィウスの西約二〇哩のミゼヌムで艦隊を指揮していたが、この噴火を知って現場へ急行する途中、ガスにおかされ窒息死してしまった。この書簡によると、ミゼヌムですら大地の震動に潮が追いかえされたように海岸が広くなり、夥しい数の魚が乾いた砂

の上で躍っていたという。ポンペイは最初軽石、ついで火山灰のため埋没したが、建物の二階の部分は地上に露出していた。のち永く風雨にさらされてそれらは崩壊し、さらにたびたびの噴火により市街は地上から姿を消すようになったのである。

ポンペイ俯瞰

発掘について

ポンペイの遺跡は、一七四八年、偶然なことから発見された。本格的な発掘がはじめられたのは一八六〇年からである。今もなお、発掘は徐々に進められているが、現在までに発掘されたのは全市の五分の三に近い地域である。非常な労力と時間がかかる方法で行われているため、完了するまでにはなお数十年かかるのではないかと推定されている。

市街はほぼ楕円形を呈し、面積は約六六ヘクタール、ちょうど東京の上野公園全地域の広さくらいである。周囲の延長二六〇〇米、要所に八基の門をもつ城壁をめぐらしている。現在市街は九区劃(Region)に、区は道路に囲まれた建物を単位とする幾つかのブロック、即ち島(Insula)に細分されている。各々の建物に番号がついていて、Reg. VII, Ins. X, n. 5 とあれば「第七区第十島第五号」の意味である。道路はすべて敷石で舗装されている。その幅は大路で六―七米、小路では三米余。ところどころに踏石を並べ横断するときの便を計っている。広い道路では片側又は両側に人道があり、車道では深く食い込んだ車の轍の跡がみられる。街かどに水道の共同栓が設けられ、その下には石造の水槽が備えられてあった。

一説によれば埋没してから数日の後、カンパニアは物凄い雨におそわれたといわれる。そのためもあって軽石は固くかためられ、これに挟まれた人間や家

畜の屍体はすっかり朽ち果てたが、発掘にさいしてその部分がそのまま空洞となって発見されることがある。発掘主任であったフィオレーリはこの空洞にポンプで石膏を流し込むことによって人型を造り、好条件に恵まれた場合のみに限られるが、一応この最後の悶死の日の姿を再現することに成功した。

最近の発掘現場

アボンダンツァ街を中心に眺めたポンペイ

①「海の門」，車道と人道．②は「中央広場」全景．広場の西南隅にポンペイ最大の遺構「バジリカ」がある．裁判，公聴会，時には取引所として使用された．前２世紀の建築であるがその後改築され，ヘレニズム建築からローマ建築への推移を物語る好資料とされる．この東に接する三つの建物は「市公館」であった．中央は会議所，西は政務所，東が財務所．

中央広場附近図

0　50m
店舗
市場
ユピテル神殿
青物市場？
アポロ神殿
中央広場
アボンダンツァ街
マリーナ街
バジリカ
市公館
学校街

a＝ラーレス女神の神殿
b＝ウェスパシァヌス神殿
c＝エウマキアの建物
d＝選挙場
e＝度量衡検査所
f＝ティベリウス帝の凱旋門

西部の遺跡

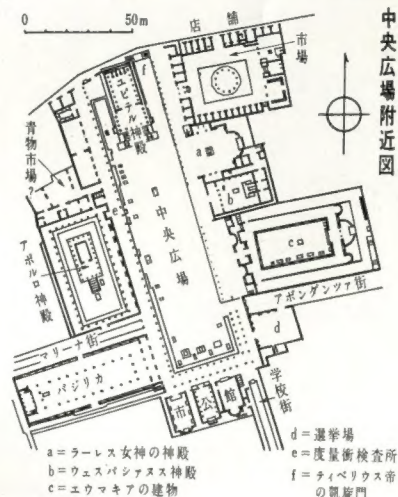
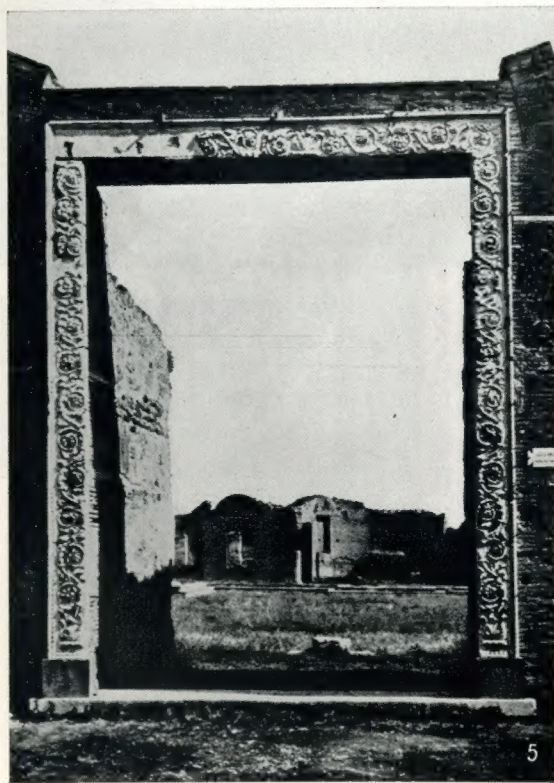
見学の順路として、普通戦後に新しく出来た現在の門から始める。以前は海に最も近い「海の門」から入った。この門は前一世紀の建物で車道と人道のために二つのアーチ門が造られている。この度の戦争で正面部が破壊された。新しい入口から入って左手に近年建てられた博物館がある。行きがけにここをのぞいてポンペイの住宅の模型や各種の遺物に接しておくとよい。マリーナ街につき当り、「海の門」と反対方向に街を進むと間もなくポンペイの政治、経済、宗教生活の中心をなした「中央広場」に達する。かつてこの広場は大理石で舗装され、その周囲に列柱をめぐらした屋根のある歩廊があり、幾つもの彫像が点々と置かれていた。様々な公共建造物が立ち並んでいた。広場の入口に近くあるのがアポロ神殿である。四基の円柱の立った廻廊で囲まれ、その中央にはコリント式円柱のある内陣のための基壇がある。その上に日時計が設けられてあった。ただ一片だけ発見された黒絵手式陶器(前六世紀)の破片はこの境内から発見されたものである。

1

3

2

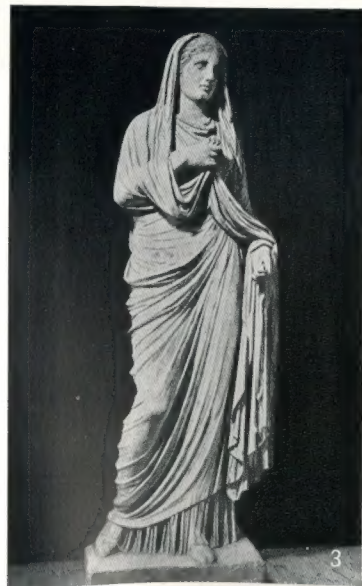
4

5

①「アポルロ神殿」．④は「バジリカ」．⑤の「エウマキアの建物」は尼僧エウマキアが，ティベリウス帝の頃にアウグストゥス皇帝夫妻に捧げるため，既存の建物の上に建てたもの．実際には洗濯業者や織物業者などの組合事務所として使われた．③はエウマキアの像．なおこの頃，これら織物業者や洗濯業者達は，強力なギルドを結成し，市の商業や市政に大きな発言権をもっていた．「ウェスパシアヌス神殿」は当時流行の皇帝崇拝のため建てられたものである．②は犠牲の光景を浮彫で表わしたその祭壇．

公衆浴場　男湯の温気室

「広場浴場」「悲劇詩人の家」

広場の東北隅にあるティベリウス帝の凱旋門をくぐって、フォーロ街を北へ進むと「広場浴場」にでる。ここでは男湯の方が保存良好で規模も大きい。脱衣室につづいて冷浴室と温浴室があり、後者は熱気室に入るまえに

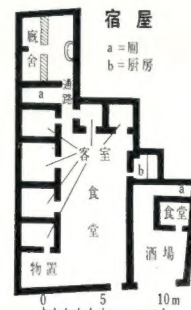
同上　復原図

身体をあたためる部屋である。その周囲には衣裳棚がめぐらされ、蒲鉾(かまぼこ)形の天井は彩色された漆喰画でかざられている。部屋の一端に矩形の湯槽が、他の一端に大理石製の水盤がしつらえてあった。入浴後、人々は冷浴室に赴いて体を冷やし、パラエストラ(体育場)に出ては競技に興じた。熱気室の背後には湯をわかす設備がみられる。

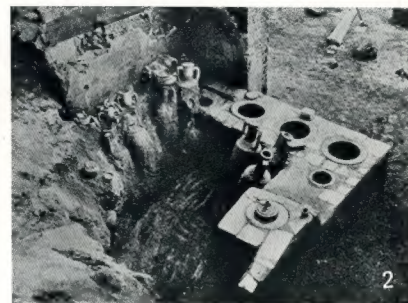
「広場浴場」の他には、スタビア門に近い「スタビア浴場」や、ノーラ街の新しい「中央浴場」、学校街の非常に小さな浴場がのこっている。

「広場浴場」の筋向いにあるのが「悲劇詩人の家」で、タブリヌムにある壁画の主題からこのように名づけられている。恐らくは、末期における富裕な商人の住宅であって、玄関の床に描かれた犬のモザイク画は有名である。リットン卿が、彼の小説「ポンペイ最後の日」の主人公、グラウクスの家にあてたのは実にこの家であった。

「悲劇詩人の家」アトリウムから奥をみる

「悲劇詩人の家」玄関のモザイク

「悲劇詩人の家」の西向いに「パンサの家」がある．その建築は前5世紀の末葉に遡るが，後度々増改築されて今に至る．①はそのアトリウム．周囲の小住宅，店舗等興味をひくものが多い．コンソーレ街を北へ，右手に「外科医の家」がある．④は入口，この建築はサムニート期のもので今遺る最古の住宅の一つ．⑤は外科用器具．この辺からエルコラーノ門迄の間では居酒屋兼宿屋が軒を並べ，ポンペイの駅前通りの感がある．宿屋の壁に「ここにウィビゥス・レスティトゥスただ独り眠る．その心彼がウルバナ(妻か恋人)を恋うるの情に充つ」という落書がある．②は居酒屋兼宿屋．③はその復原図．

城門と「墓の道」

古典時代の西方世界では、墓を城門外の道路に沿ってつくるのがつねであった。ポンペイでもこの例に洩れず数多くの墓がつくられている。なかで「エルコラーノ門」外のそれらは、他を圧して立派である。様々の形式の墓が道の両側に塁々と並んでいるが、暗い感じがなく、のどかな風景である。ポンペイには高さ二〇呎、幅六ヤード半の城壁がめぐらされており、それは八つの城門――「海の門」、「エルコラーノ門」、「ウェスーヴィオ門」、「カプア門」、「ノーラ門」、「サルノ門」、「ノチェーラ門」、「スタビア門」を開き外部との連絡口としていた。「エルコラーノ門」から「ヴェスーヴィオ門」の間では城壁や望楼が最もよく保存され、城壁の上部では、隊伍を組んだ兵隊が行進できるようになっていたことが判る。

「エルコラーノ門」①は，ポンペイ市の正門で，路はここからネアーポリス（今日のナポリ）に通じていた．門はアーチのある通路を三つあけていたが，中央の車道の部分がまったく壊れている．防禦施設がないのは，ローマに服属した直後に築かれた，ポンペイのうちで最も新しい城門であり，もはやその配慮が不必要だったからである．「墓の道」②③の附近には豪華な別荘が散在する．④はヴェスーヴィオ門附近の第10号望楼．

墓のうちで最も典型的なのが「ガイウス・ファウストゥスの墓」である．墓碑の側面④は，順風をはらんで眼界に向う船を浮彫であらわす．③は「カルウェンティウスの墓」．この下方には，彼が功績によって市会から授けられた劇場の特別席が刻まれている．附近に別荘風の邸宅が散在し，中でも「キケロ荘」と「ディオメデス荘」は有名．前者は1763年に発掘ののち，再び埋められた．後者は，富裕な葡萄酒商の三階建の別荘．

その庭②はポンペイで最も広い．西側の歩廊の近くに二つの遺骸が発見され，その１人は大きな鍵と金貨10枚，銀貨88枚をもち，指に金指輪をはめて倒れていた．奴隷をつれて逃げる途中倒れたこの家の主人であろう．歩廊の下は酒甕を貯えるための小窓のある半地下室であった．ここで18名の大人と２人の子供の遺骨が発見され，その中には金指輪４個，銀指輪２個の他に，首飾り，腕輪各２個をつけた婦人のそれもまじっていた．

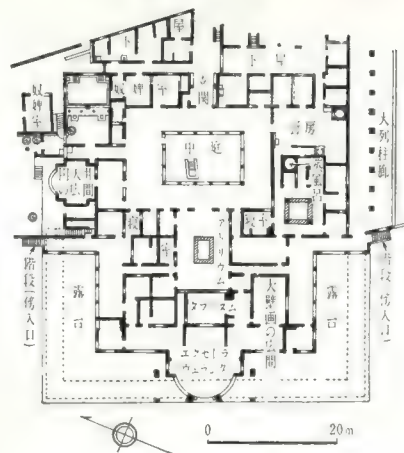
「神秘の家」

「墓の道」を、「エルコラーノ門」から西へ約三五〇米。豪荘な「神秘の家」が右手にみえてくる。有名な壁画の主題からこのように名づけられた。

建物は正方形のプランを呈し東南東に面している。もっとも前三世紀の中葉に建てられた普通の上流住宅に、その後たびたび増改築が加えられてこのように宏大なものとなったもので、最初の玄関もパルコニー風に改造され、裏手には新しい玄関が設けられた。結局、タブリヌムと北側の一、二の部屋を除いては前一世紀のもので、壁画も第二様式にかかっている。

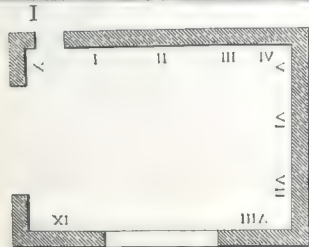
神秘の家

中庭
アトリウム
大壁画の広間
露台
露台
大列柱廊
0　20m

①「神秘の家」の外観．西南よりみたところ．先ず南側の登口の階段から建物に上り，半円形の瀟洒なヴェランダを通ってタブリヌムに入る．アトリウム③は立派な広間でその両翼には家族の居室や寝室が幾つも設けられている．②は玄関．一般にポンペイの住宅は二階建であったが，今はほとんど見ることができない．古い石造建築も多少は残っているがその殆んどが煉瓦造で，木材は屋根や軒先に用いられていただけであった．

「大壁画の間」に入ると，壁画の美しさと，全体にみなぎる神秘な雰囲気に圧倒される．古代世界におけるもっとも豪華な壁画の一つであろう．この大壁画の意味については永い間論議されてきたが，大体一致をみている解釈によると，ディオニュソス教という当時の秘密結社のごとき教団へ，新たに入団する一婦人に対する儀式をあらわしたものとされている．壁面は縦 1.62ｍで，矩形の周壁全面（延長17ｍ）に壁画が描かれている．

くすんだポンペイ赤の地に，明褐色，黄金色，暗褐色を用いて描いてあり，仔細に眺めてゆくと，10 場面から成っていることがわかる．この壁画は前一世紀中葉の製作であるが，様式の上では第 2 様式の代表的な例とされている．22～23 頁に掲げる第 Ⅷ 場面の婦人の半裸像の取扱いからもわかるように，絵画としては成熟したものではないが，しかし古代におけるもっとも感銘深い作品の遺例であるといっても過言ではないであろう．

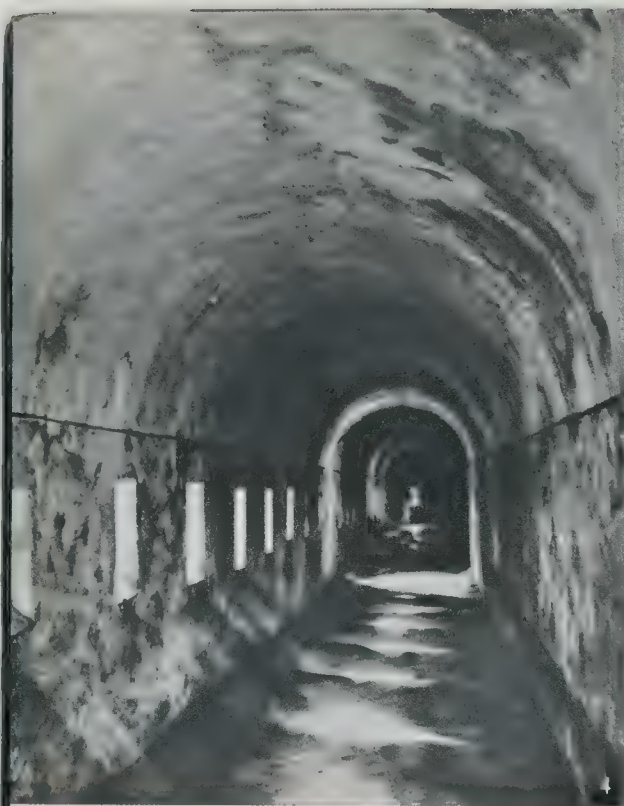
I　　I　　II

III　　IV

I）祭尼の指示をうけた少年が儀式の次第を新入団の婦人に読みきかせている．II）供物を運ぶ婢と３人の婦人．中央は祭尼，式の順序を指図する．III）老いたシレヌスが七絃琴（キターラ）を奏でながら唄う．婦人の前には犠牲の羊．IV）これから課せられる試練におののく新入団者．V）シレヌスは両手に予言の壺を，２人のサテュロスのうち１人がそれをのぞき込む．他の１人が手にしているのは多分魔除けの仮面であろう．VI）ディオニュソスとアリアードネの結婚，これは入団者を待つ別の世界の象徴であろう．この辺で壁画はいたく剝落している．VII）入団者が多産の象徴物の覆布を取り去ろうとすると，翼のある乙女があらわれ彼女を鞭打つ．彼女は杖罪をうけ，神秘なものをのぞいた罪を贖うのである．VIII）試練がすんでがっくりした婦人．一方にバッカスの祭尼が踊っている．試練の終了を祝っているのであろう．IX）入団式に出るために化粧をする婦人．X）祭尼であった婦人が覆いをまとった姿で，この家の女主人であろう．

V　　VI　　VII　　VII

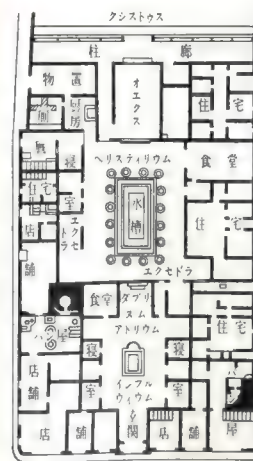
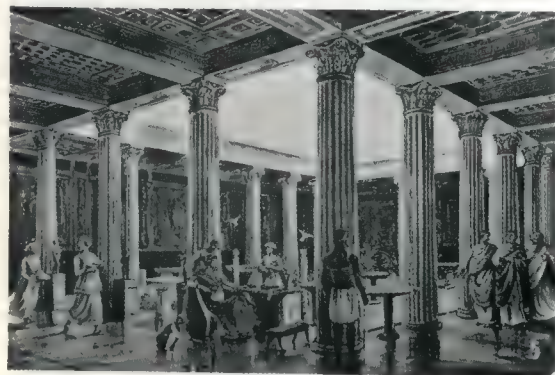
VIII

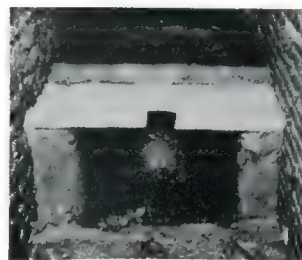
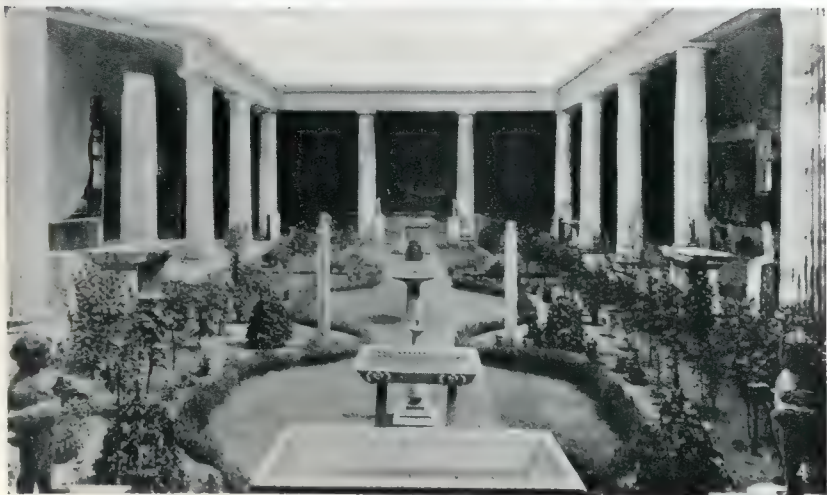
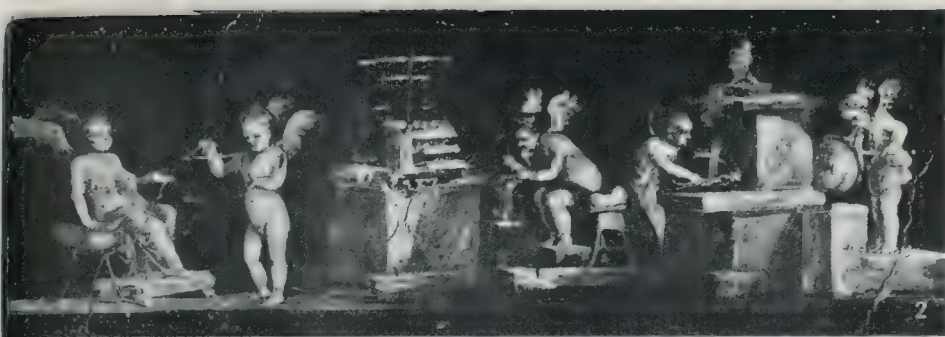
IX

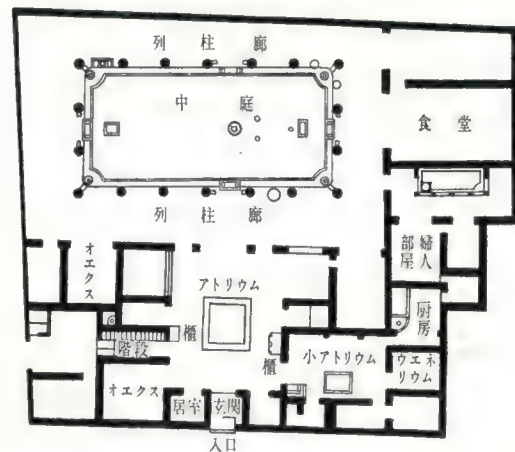
X

①厨房，右端は調理台，中央は大きな竈．②は葡萄の圧搾室，臼からしぼり出される汁は床下の鉛管を通り，北側の醸造室（未発掘）へ送られる仕組である．露台の東端に接した階段を降りるとかぎの手に設計された地下廊に出る．④ここに白骨の群があるが，祭祀室の修理に従事していた石工達のものであろうといわれている．③は列柱廊の東北部に立つリウィア（アウグストゥス皇帝の后）の大理石像．⑤下屋で倒れた奴隷の死骸．

東北部の遺跡

エルコラーノ門にもどり，コンソーレ街，メルクーリオ小路を行って南におれると「悲劇詩人の家」の北手に「大噴泉の家」がある．③はそのエジプト風の豪華な噴泉龕．この型式はアウグストゥス帝の頃イタリーで流行したもの．ノーラ門①はポンペイで一番古く，サムニート期の構築にかかり，凝灰岩の切石で造られている．門外にはまたいくつかの墓がいとなまれている．②はヴェスーヴィオ門に近い貯水槽．郊外から来る水道の水をうけ三つの幹線水道管に分けて流す設備であった．

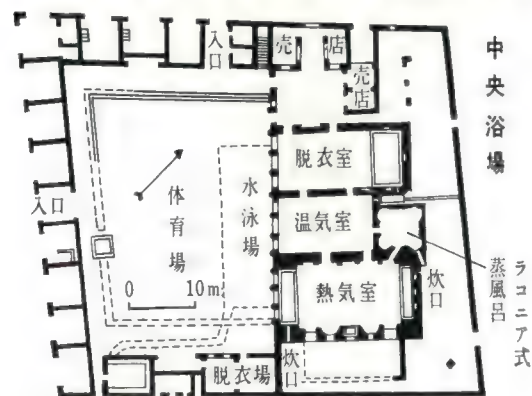
ポンペイの住宅

住宅の造りは様々であるが左に掲げた一般的な例で一応の概念は得られると思う。先ず街路に面する玄関から入ると広間がある。屋根は葺き落しで中央のコンプルウィウムは採光や通風に役立ち、雨水はそこからアトリウムに注ぐが、それをうける浅い矩形のくぼみ(インプルウィウム)が広間の中央に設けてある。広間の両側の小さな部屋は寝室にあてられ、タブリヌムでは来客が接待された。翼室には古く神棚が祀られた。住宅の後廓は列柱廊が中心である。列柱が中庭を囲んで矩形に廻らされ、内側はモザイクか石で床を張った幅広い廊下となっていた。列柱廊に面して寝室、夏の食堂、オエクスなどが並んでいるが、オエクスは客間、主婦室、応接室など家により異って使用された。厠は厨房に近く、その流し水で洗滌した。住宅は外に向っては殆んど窓のない塗籠のため寝室は昼でも暗い。そのせいもあって人々は昼の大部分を列柱廊で過した。

「ウェッティウスの家」
古くから知られているこの家はメルクーリオ小路の四辻に面している．間取は他と違うが，壁画や中庭の見事さからみて，ポンペイ末期の代表的な商人の住宅とみなされる．①は踊る二神，ポンペイ赤の地に描かれた自然で溌剌たる肉体，軽やかに翻る裙衣が注意を惹く．③⑤は列柱廊と，その復原．

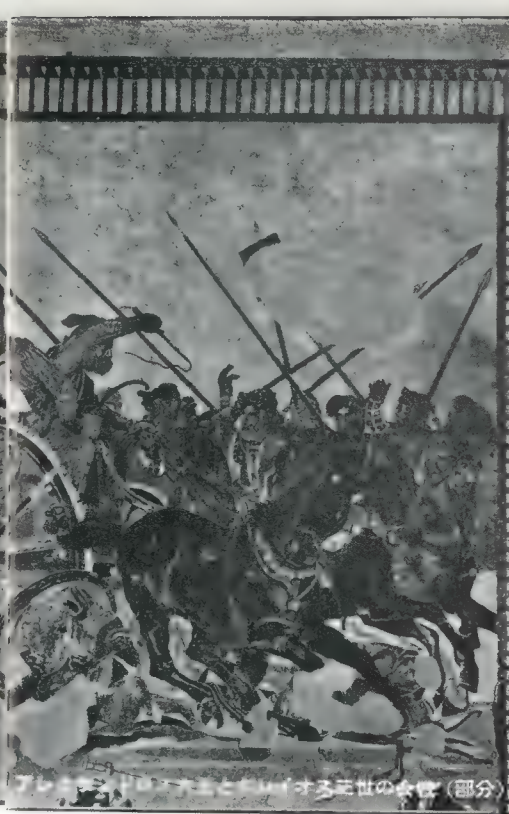
北のオエクスの壁画②は第四様式．左右上方は透視画法に依っている．④はローマ時代の厠（オスティア）．

食堂の壁画は有名である．それらはその頃の農工商業の風俗を，キューピットで表わしたもので「職人尽画」や「鳥獣戯画」をおもい出させるほほえましい作品である．①②は薬屋．③は酒売のエロス．④中庭にはまた噴水や大理石の水盤が巧みに配置されている．35頁の④はこの家のウェネリウム(愛戯室)の壁画の一部である．ウェネリウムは，外部から婦人をむかえたときに使用する部屋で，ふつう天真爛漫な壁画が描かれる．

ウェッティウスの家

「銀　婚　式　の　家」
「金のキューピットの家」

④は「ウェッティウスの家」の厨房．この家から東へメルクーリオ小路を行くと，右手にポンペイの代表的な上流住宅の一つ，「銀婚式の家」がある．インプルウィウムに立つ四基のコリント式円柱で屋根の支えられたアトリウム①が印象的である．②は「金のキューピットの家」の列柱廊と庭．ここから鍍金のキューピットがでたのでその名がある．現在第5区の発掘はこの辺で終っており，ここから東は砂，火山灰，こまかな軽石などが堆高く積っている．ここから踵をかえして「踊る牧羊神小路」を南にすすむと，ノーラ街との辻に「百年祭の家」がみえてくる．③は新婚の夫婦をあらわしたコリント式柱頭である．

「百年祭の家」

「百年祭の家」は三つの住宅を結合したもので、部屋の数は四〇に近い。モザイクの美しい床と大理石のインプルウィウムをもつアトリウムは第四様式の壁画で飾られ、中にイシス女神の信仰に題材をとったものが見られる。また、「大噴泉の家」でみたような立派な噴泉龕が遺っている。この家のウェネリウムの壁画も有名であるが、この見学には発掘事務所の許可が必要。ノーラ街を東に進むと「ノーラ門」に達するが、見学の順路としては、ふつうこの家から踵を返し、「中央浴場」をたずねる。「中央浴場」の南に接し、マルス神の司祭でポンペイの十人隊長であった「マルクス・ルクレティウスの家」がある。

①は噴泉龕（百年祭の家）．中庭にこうした噴泉を設備する家は少くない．これは紀元１世紀初めの流行であった．②は厨房の神棚に描かれた壁画．バッカスが葡萄蔓でウェスウィアス山の麓を捲いたという説話から取材している．現在と異なりそのウェスウィウスは円錐形を呈し，頂上まで樹木が茂っている．この山を描く唯一の壁画である．③は「マルクス・ルクレティウスの家」．噴泉龕と水槽にヘルメス像が祀られている④はウェネリウムの壁画．

アレクサンドロス大王とダレイオス三世の会戦（部分）

牧羊神像

「踊る牧羊神の家」

「中央浴場」からノーラ街を通り、西へしばらく行くと、右手に「踊る牧羊神の家」がある。濫掘のため保存がよくない。

美術史の上でよく知られている「踊る牧羊神像」（青銅）はこの家のインプルウィウムから発見されたものである。いま現場においてあるのは模型である。世界的に有名な「イッススの戦」（前三三三年）に取材した「アレクサンドロス大王とダレイオス三世の会戦」のモザイク画もまたこの家のエクセドラの床を飾っていたものである。

ポンペイの各種の建物は、たとえそれが貧者の住居であっても、床面はモザイクで仕上げられたのが普通である。単に陶片をはめ並べた粗末なものから、色とりどりの大理石片や玻璃片をちりばめたものに至るまで、多種多様なものがある。床の中央に絵画を置き、周囲に花飾、小鳥、動物、仮面、果実、愛神などを配する構図がこれらモザイク画の特色である。これらがアレクサンドリアから来たモザイク工の手を煩わしたものであろうことは、ニール河、河馬、鰐など、エジプトの風景に取材したものが多い点からも想像される。最後の時期（フラウィウス期）に入ると壁画装飾をはじめ、モザイク画も繁縟になれ、生気やおおらかさが失われてきている。

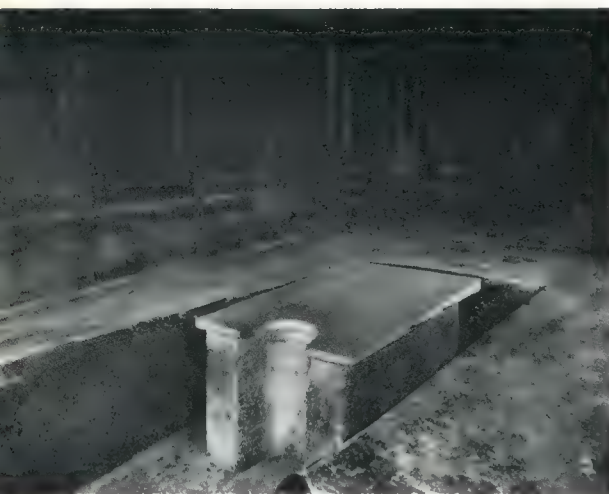
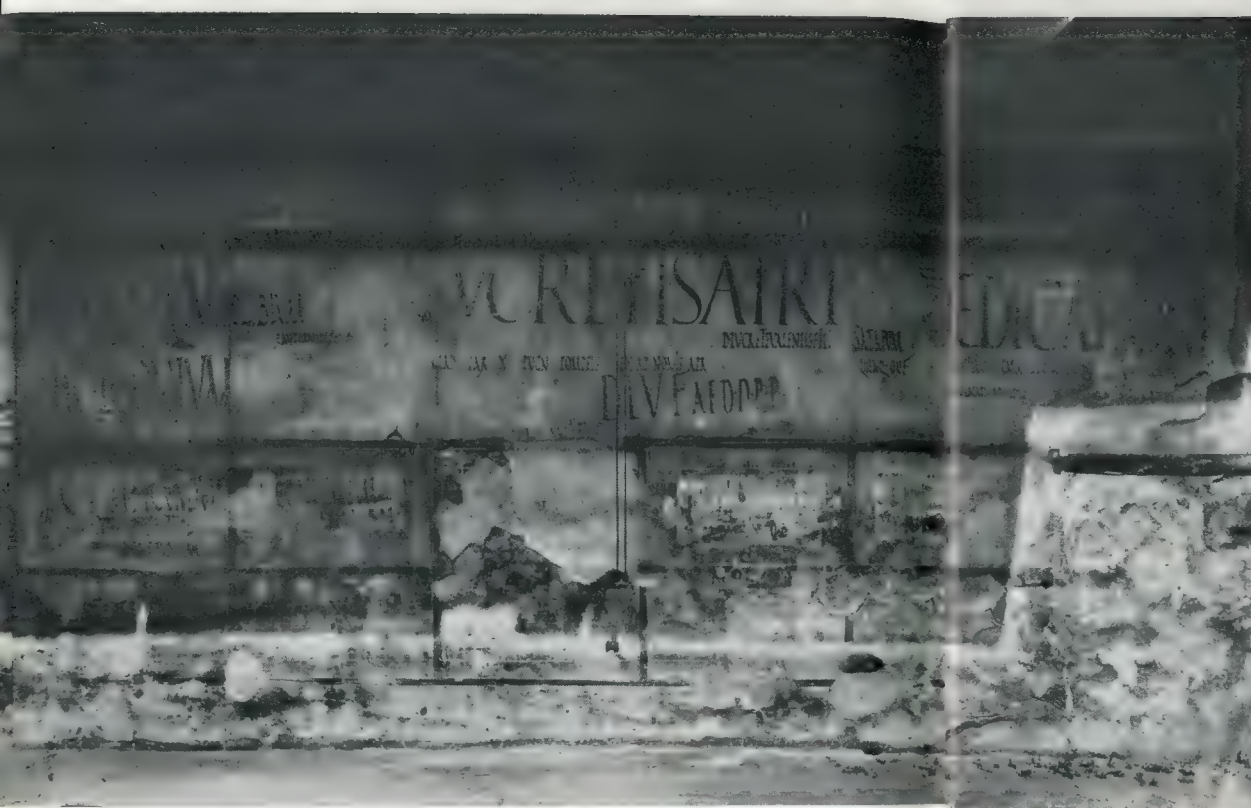
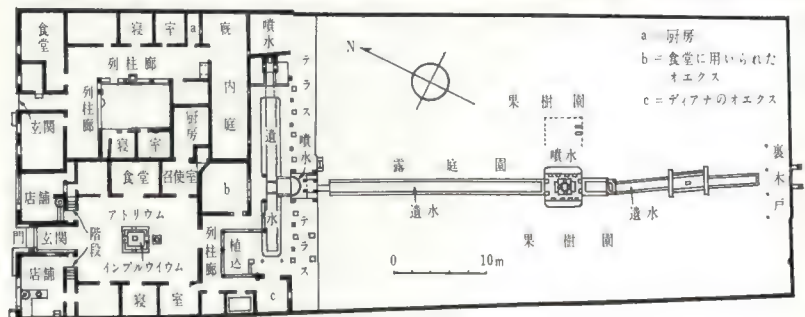
アトリウム

④は内部．壁面の落書が興味深い．アボンダンツァ街⑥に沿いルパナーレ小路とスタビア街にはさまれた一郭を「スタビア浴場」が占める．その向いに「コルネリウス・ルーフォスの家」がある．ここではアトリウムの大理石の台脚①に注意．

「牧羊神の家」から「うねうね横町（ヴィーコ・ストールタ）」を行くとパン屋②がある．③は復原．⑤はルパナーレ（娼家），

「新発掘地域」の遺跡

アボンダンツァ街を東に進み、テスモ小路を横ぎると「新発掘」の地域に出る。誰しも家並が急に保存良好となっていることに気づく。「新発掘(スカーヴィ・ヌオーヴィ)」とは、一九一〇年来、発掘主任スピナッツォーラによって始められた発掘法で、遺跡を発掘の上、丹念に原状に復する方法。現在は主にアボンダンツァ街で試みられている。

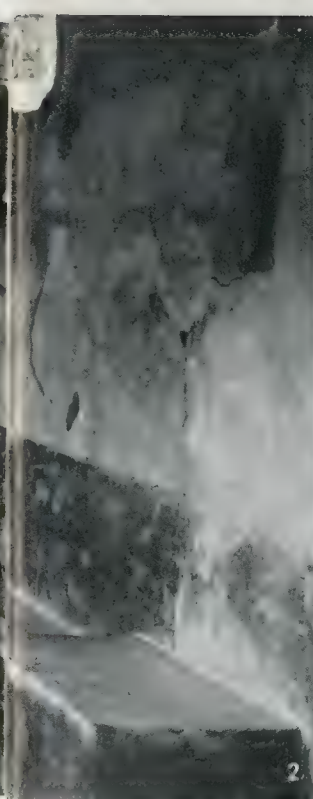
①「ステファヌス洗濯店」，水槽をおいた仕事場．大小の洗濯甕が中庭にならべてあった．ここから東へ少し行くと，左に居酒屋がある．これは最も保存のよい例で，計量器や，酒甕(アンフォーラ)，番号札，ランプ等のほかに，絵具で描いた居酒屋の標もみえる．向い側にあるのが「パキウス・プロクルスの家」．玄関にはつながれた犬のモザイク画が残っており，アトリウム②の床④もよく保存されている．夫妻の肖像画③は美術史上に有名である．

①アボンダンツァ街．②は染物屋．③「トレウィウス・ウァレンスの家」の掲示板．選挙の立候補者とか劇場のプログラム等を誌したものだったが1943年の爆撃で破壊された．「プロクルスの家」から100m，第１区第９島からインドの象牙製の女神像④が発見された．インドの貨幣が発見されたこともあるが，それにしても大規模な東西文化の交流が考えられる．⑤「道徳家の家」の食堂．この家には珍しく，透明な窓硝子が残っていた．

「ティブル
　　ティヌスの家」
第２区第５島の殆んど全部を占めている．アトリウムの壁が生地のままなのは，噴火の折に丁度壁画を描こうとしていたためと考えられる．インプルウィウムは縁を二重に廻らしたすこぶる豪華なもの．廻廊に立つと芝生におおわれた（昔は果樹が植えてあった）広庭に細長い露庭園が臨まれる．①は裏庭からみた全景．④は葡萄棚．③はヘレニズム後期の手法で描かれた肖像．この家の愛嬢であろう．この家族もまた，イシス女神の信者であったことは，邸内から発見されたいくつかのエジプトの神像や，オエクスの壁面に描かれたシストル（祭器の一種）を右手にした司祭ティブルティヌス②の画像からみても，あきらかである．

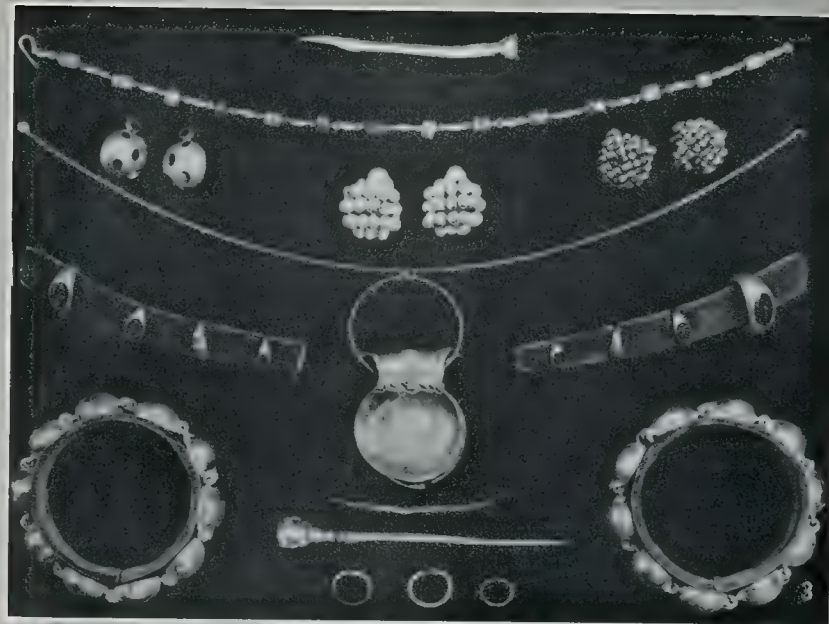
ロレイウス・ティブルティヌスの家

「円形劇場」

「円形劇場」は、ローマのを模して前八〇年頃に造営された。長径一五〇米、卵形の大規模なものである。収容人員はおそらく二万を下らなかったであろう。ここでは闘技が演じられ、それは捕虜同志を闘わせたことから始ったといわれている。

銘辞によると、クインティウス・ワルグスと、マルクス・ポルキウスの両人によって造営された。彼等は二頭奉行に再選されたことを記念して、市にこれを寄附したのである。「円形劇場」を中心とする最後の日のありさまは、リットン卿の例の作品の五巻にいきいきと描写されている。

「円形劇場」の観覧席は通路で上中下に三区分され，下方は貴賓席であった．観客は切符とクッションをもって入場した．象牙製の入場券が残っている．南北に主要入口があり外壁の階段③からも入場できる．西側には「リビティナ門」又「死の門」とも呼ばれ，闘技に敗れた者の死屍をひきずり出す門がある．大パラエストラは貴族青年団の訓練や体育を目的とした設備,「円形劇場」の西にある．②はパラエストラで悶死した人．

「地　下　廊　の　家」

「大パラエストラ」の北辺の道を西へゆくと，第１区第９島につき当る．途中北側一帯は現在さかんに発掘が行われ，サムニート期の住宅が明らかにされつつある．北へ少し行くと第１区第６島で，ここの「地下廊の家」の裏庭は多数の遺骨が出たことで有名．アトリウムや列柱廊は装飾もない質素さであるが，中庭に，壁画のある地下廊がある．最後の所有者は単に貯蔵所として使用したらしく，無造作に室が仕切られて，隅に甕が並べてあった．はじめは住居として造られ，後に貯蔵所に使用されたのであろう．このことは壁画の様式からもわかる．「哲学者の間」の壁には燭台を中心に相対する二頭の象が描かれている④．構図が古代インドの浮彫のそれと相通ずるものであることは興味が深い．①は地下廊へおりる階段．③は寝台，②は食堂である．

①エクセドラの壁画，黄色に褐色と白でえがかれた椅子にかけ左手に巻物をもった喜劇作家メナンドロスである．②オエクスのモザイク床．③は地下倉庫の櫃から出た宝飾品，この他 115 点の銀器や貨幣が一緒に発見された．④はアトリウム．

「メナンドロスの家」

「メナンドロスの家」は、道路をへだてて「地下廊の家」の南に接している。この邸宅の持主はクイントゥス・ポッパエウス家という名門の貴族であり、それだけに面積も第十島の大部分を占め、まことにポンペイ屈指の住宅である。門は北に向って開かれ、コリント式柱頭の角柱からなっている。外壁に腰掛が設備されてあった。アトリウムの壁は狩猟の有様や風景を描いた第二様式の壁画で飾られ、大理石ばりのインプルウィウムやその中央の水盤もまたみごとである。腰壁のある列柱廊に出ると中庭に噴水と排水溝の設備がみられる。その腰壁に植物文様や蒼鷺が描かれ、列柱廊の西側の浴場では特に熱気室の保存がよい。そのモザイクの床絵には海に因んだ題材がえらばれている。

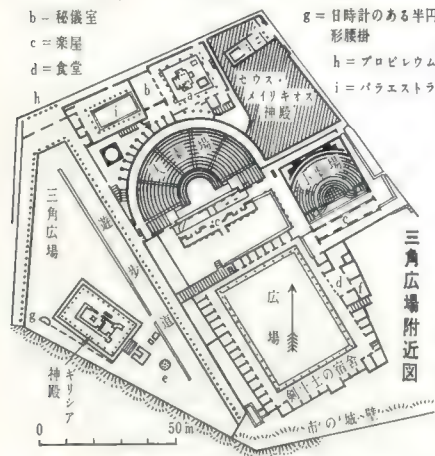
母屋の西側と東南部はこの家の下屋になっている。この一廓から種々の農具、家具、工具、車輌、その他細々した遺物が出土し、これはまた当時の家内奴隷の生活を研究する上の格好な資料である。東北端にある諸室は、クイントゥス家の支配人の住宅であったと推定される。もと独立していたものを後になってから母屋と連絡したもので、東側に玄関が設けてあった。なお母屋に召使達の住宅に充てられた二階があったが、それらはもはや現存せず、玄関脇の階段のみが僅かに残っているにすぎない。

①エクセドラには神棚のための龕がある．そこに木製乃至蠟製の15～30cmの稚拙な偶像が5体安置されていた．家族の祖先を祀ったものと思われ，ローマ古来の宗教的伝統が国際的宗教の盛行にも拘らず，なお根強く残存していた事情を示す．②も神棚のあるアトリウム．列柱廊の通路からは10人の男の遺骸が発見され④，足首に鉄輪の足枷をはめている点から，奴隷であることがわかる．③下屋．

巨人の像（小劇場）

南部の遺跡

親子の遺骸

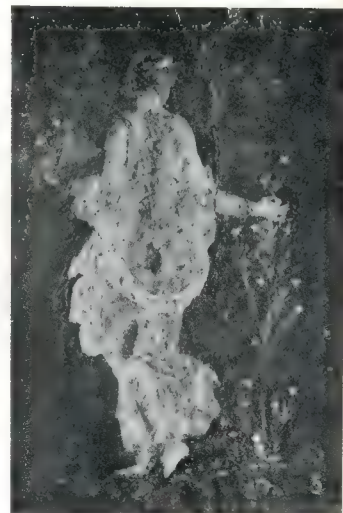
「メナンドロスの家」の前を通る道(円形劇場街)を西に進み、「チタリストの家」(キタ－ラをひく人の意)を右手に見つつスタビア街を横ぎると、ポンペイ第二の公共建造物地帯がひらけてくる。先ず最初に近づく「イシス神殿」は六三年以後、献金によって建てられたもの。ポンペイの諸神殿のうちでは最もよく原形を保っている。当時はエジプトとの密接な関係もあってイシス女神の信仰がさかんであった。神殿の前にある祭壇の上には、発掘の際、犠牲の骨や灰が当時のまま残っていたとのことである。

この神殿の西に接して「パラエストラ」がある。サムニート期に財務官ウイビウス、ウイニキウスが少年達の体育場として寄附したもので、のちにイシス神殿が拡張されたために境内はせばめられ、東側の列柱を失う結果となった。列柱の型式は細身のドリス式である。

「大劇場」は長径六三米、半円形の露天劇場である。五千人の観客を収容することができた。舞台裏に三つの戸口と幾つかの龕が設けられていて、ヘレニズム時代の劇場としては普通によくみられるような構造である。

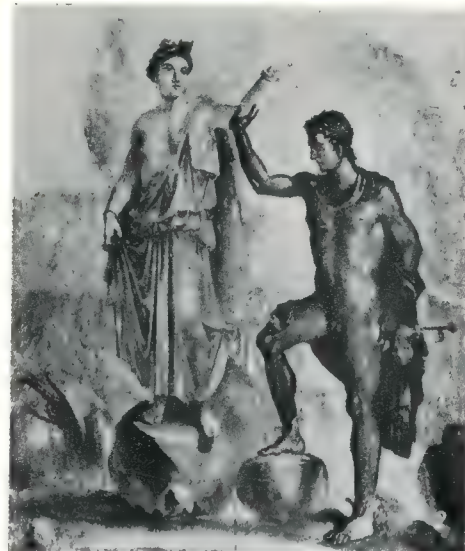
大劇場

三角広場附近図

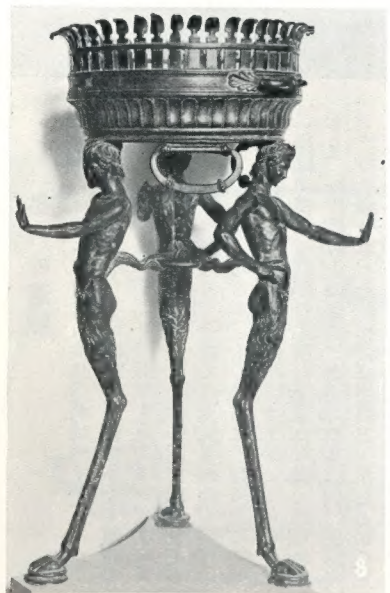
イシス神殿

「小劇場」は約1500人を収容できる被蓋劇場で実際は音楽堂(オデオン)として使用された．③は劇場に附属したパラエストラ．これにつづく細長い二階建の建物②は後に「剣闘士の宿舎」にあてられた．④は「大劇場」の壁に描かれた戯画．「剣闘士の宿舎」を西へ，道路を越えたところが「三角広場」である（前頁の図参照）．この広場でも毎日さかんに商取引が行われたらしい．広場の中央に近く「ギリシア神殿」の遺構がある．ドリス式の円柱や出土したテラコッタからみてその創建は前６世紀を下るまいといわれる．ネアーポリスなどのギリシア文化の強い影響がうかがわれる．「三角広場」から女王小路を西に，更に北へ折れ暫く行くと，初めに見学した「中央広場」に出る．

⑥サッフォーの像を描いたと伝えられる若い女の肖像画（ナポリ博物館）．右手にスティルス（一種のペン）と木簡をもち，緑と黒で描かれている．

⑤花摘む乙女　（ナポリ博物館）
80×50cm の小品ではあるが美術史上に有名である．緑地に黄色と黒褐色でえがかれ，ポーズはきわめて自然である．特に綾羅のかるやかな描写に注意．

③アンドロメーダを救うペルセウス．高さ1.35m，海岸の岩につながれたアンドロメーダを救いに，飛行靴をはいたペルセウスがとんでくる光景である．激浪，岩壁，山岳などの描写を注意すべく，構図自体も東洋的な感じである．④お手玉で遊ぶ女達（ナポリ博物館）．50cm 平方の大理石に黒と茶で描かれ，これはアテナイの画家アレクサンドロスの原作を模したもので，ヘレニズム時代の代表作．⑦ニール河風景（ナポリ博物館）．

②アンドロメーダを救うペルセウス．
3×7mの大作．劇的な表現に欠けるが写実の妙と，巧みな色彩効果で壁画中の傑作とされる．

①アヒレス　（ナポリ博物館）
高さ1.3m．女装して隠れていたアヒレスがオデュッセウス（右側の槍をもつ人）にみつけられた光景．動きをよくあらわした壁画の一例である．

ポンペイで発見された遺物は，尨大な数に上っている．大部分ナポリ博物館に収蔵され，現地の博物館に陳列されているものは標本程度にすぎない．遺物の種類は百般にわたっているが，パンや木の実など特に注意をひく．魚の鱗もある．文字が書かれた大理石なども多いが重要なのは数個発見された書板である．板に蠟をぬってその上に文字を記し，簡単な消息に用いられたもの．消しては幾度も使用された．文字のしたためられた草紙(パピロス)は一片も見出されていない．

① 柄鏡の背文(メナンドロスの家)
② 剣闘士の兜(ナポリ博物館蔵)
③ アンフォーラの群
④ 青銅の火舎(火鉢)
⑤ 両耳銀盃(メナンドロスの家)
⑥ 青銅の提瓶(メナンドロスの家)
⑦ アフリカを象徴した銅版
⑧ 青銅製三脚の卓子，台脚はサテュロスを表す(ナポリ博物館蔵)

オリーヴを潰す石臼（左）と　手臼（右）　ボスコレアーレ

農村の遺跡

ウェスウィウスの噴火により、ポンペイやヘルクラネウムばかりでなくその南麓の農村の多くも運命を共にした。ポンペイ郊外のボスコレアーレ、グラニャーノ、スカファーティ、その他の村で埋没住宅が多数発掘されている。今までに発見されたものは中流以上の農家であるが、その生活は予想以上に裕福であったらしく、例えば、ボスコレアーレのものは二階建の構えで内部の主要な部屋は壁画で飾られており、一千枚以上の金貨、黄金の腕輪六個、三〇インチの金鎖一本、それに食卓用銀器一組などが発見されている。巧拙の差はあるが、どの農家でもアトリウム、熱気室　居室などには壁画がみられる。遺構を調査して先ず注意されるのは「神秘の家」でみたような醸造設備がどの農家にも見られることで、彼等が葡萄酒の醸造に力を注いでいたことがわかる。小麦の栽培もかなりさかんであったらしい。そしてどの家も数名の住み込みの農夫（恐らくは農業奴隷）をかかえていたことは遺構の上から明らかである。ローマ時代、ことに奴隷制時代といわれた前二世紀から一世紀までの間、奴隷の総数は数十万に上ったと推定されている。しかしこれらの研究は、もっぱら文献に基いたものであって再検討の余地が少くない。ややもすれば文献には特殊な例―広大な土地とおびただしい数の奴隷とをもち、彼等を牛馬のよう

農家の遺構　グラニャーノ

に酷使した大土地所有者―のみが書きのこされているからである。この点で遺跡の研究が強く要望される。身分としての奴隷と実質的な奴隷との混同なども、農村遺跡の研究によって自ら避けられるであろう。農家の遺構はもちろん市街の邸宅のように豪華ではないが、これら農家を詳細に調査することによって、帝政時代初期のカンパニア地方、ひいては共和政時代、帝政初期のイタリーの農業や奴隷労働の実体がかなり微細に判明するであろうし、それは当代の社会経済史の研究にとってもきわめて大きな意義をもっている。

グラニャーノ村にある農家

遺跡索引

ウェスーヴィオ門から眺めたポンペイ